

一時四十分ハダマ(Hadama)驛着。此れはア
ビシニアの停車場としては可なり大きな部に屬
するもので、農業の中心をなして居ることを
知る。稍豊富な農作物が驛に集つて居るのを見
又歐風建築中の倉庫様の家が見られる。

土人の帶劍する者がある。奇妙な事には彼等
は劍を右の腰に下げて居る。普通とは全く反對
である。通常彼等は帽子を戴かないが或るもの
は植物性纖維を以て作つた帽子を被て居り、又
或者は布を以て頭を覆つて居る。但しその布の

被り方は幾分アラビア人やヒンドウの被り方と
は異なる様である。劍は直刀で短刀であるが、可
なり立派なものである。足には歐羅巴風の靴を
穿いて居る者もあるが、此れは新式で、古式は
靴ではなく草製の草履であるらしく、此れを穿
いたものも認められる。勿論靴や草履を穿いて
居る者は上等の人間で、大抵土人は跣足である。
服装は殆んど一樣であると云つてよい。即ちシ
ヤンマである。貧富の差別はそのシヤンマの布の
材料如何にあると云ふより外はない。(未完)

伊太利とくろぐ (二四)

瀧川 規一

【爾餘のツルバズール詩人】

(十九)【リチャード一世】 英國王チャード一世

もツルバズールの一人であつてラング・ドイル
語及バラング・ドック語の兩語で詩作が出来た

と云はれてゐる。現存の詩は獄中の作で美しい
詩が只一篇ある。

(廿)【カルヅナル】 ツルバズールの衰退期に
入つた最初の詩人はペイル・カルヅナル (Peire

Cardenal)・ウィヤル・バイ(Le Pay) 出身の詩人である。彼はアラゴン王ジャクム一世(Jacme I)に保護されてゐた。シモン・デ・モンフォールの軍隊の爲に追はれてナルボーン及びツールから逃げて來た。この詩人は道德的倫理的な詩を作り、マーカブルンの傳統を追うて僧侶階級を諷刺した。彼は殆ど百歳の長壽を保つて世を去つた。

(廿)「フイギユイエラ」ギレム・フイギユイエラ(Guillem Figuera)と云ふ詩人はツールズの仕立屋の息子であつた。彼は公然の異端であつてライモン二世に保護されて居り公然と法王政治を攻撃する詩を作つた。彼が詩を發表すると一節一句毎に反對の詩を發表した女流詩人がある。名をモンペリエルのゴルモンダ(Gormonda)と云ふ。

(廿一)「リキエル」佛蘭西ツルバズールの最後の詩人として有名な者はギロー・リキエル(Guiraud Riguer)であつて一二三〇年頃から一二九四年まで生存してゐた。彼はナルボーン又生

れであつて土地の子爵夫人フィリップ(Philippa)に初期の詩を献題したが、この婦人は詩を獎勵しなかつた。詩人は故郷を去つて最初サンリス(Saint Louis)に訴へたが成功せず遂に西班牙に入り博學の王と渾名されるアルフォンソ十世の宮廷に保護された。この國王は自ら大詩人であつて、南佛の難を避けて集り來るツルバズールの群を歓迎した。國王自らツルバズールを以て自任されてゐたが國王の名で發表された詩の大半はリキエル及びナ・ヅ・モンズ(Nat de Mous)の作なりと後世の研究者は云つて居る。リキエルは一二七九年までカスチールに滞留し佛國に歸つてロデズ(Rodez)の町のアンリ(Henri)二世の許に留つた。この貴族は佛蘭西の南部又は中部に於て詩人の群を自己の周圍に集めた最後の人であつて、爲めにツルバズールの群は最後の餘光を放ち得たのである。リキエルは一二八五年頃の詩に於てはツルバズールに迫る運命の暗雲を感じ悲愴な心地を表白してゐる。ツルバズールの藝術は爾今無用不適なものであると

云ひ更に自己個人に關しては「歌は喜を表はすべきも悲は吾を壓し、吾は世に生れること餘に遅かりし」とてツルバツールの世界の終末が來て居ることを歎いて居る。彼は一二九四年頃に世を去つたが彼の後に後繼者がなかつた。

最初の詩人ギレム・ヅ・ポアチエから最後のツルバツールであるギロー・リキエルに至る四百餘人の詩人を悉く述べることは不可能であり、上述の諸詩人丈けでも既に煩に過ぐる有様である。これ等の諸詩人の種々なる經歷によつて中世戀愛の社會的表裏を察し得べくダンテに至る近代詩への連鎖を知り得るのである。ダンテの戀愛が中世詩人の精神を繼承して且つ其弊を脱し得たのみならず上述の如く神秘哲學の域に進み得たのである。

〔伊太利式戀愛〕 既述の如く古代希臘及び中世歐洲の戀愛は結婚及び肉感的愛情とは何等の關係がなかつた。彼等の情熱は永續的歡喜を與へ愛する者の心情を向上せしめ意氣昂然たらしめて勇敢なる行爲に導いた。その情熱は尙武の

氣風を作り陣營内の一風習を成し、時には理想的標準以下に墮落しても猶、旺盛なる元氣と忠義心名譽心を失はしめなかつた。希臘及び中世歐洲の戀愛は共に自然的本能を超越した愛情であつた。それが故に一時は社會的弊害を醸すことがないではなかつた。

希臘に於ては友愛が最初ドリア族の軍人氣質として起つたが次第に模倣的に傾き社會的に弊害を認められるに至つたソクラテスはこのロマンチックな情緒の力を利用して高尚なる知的生活を促進せしめんと試みた。道義の力は依然として衰へず文學歴史傳説に於てその活力を示してゐた。阿典に入つては遂にこの愛の動機が哲學化されブレートの理想愛となつた。中世歐洲に行はれた武士道はもと／＼チュートン民族の蠻風中に源を發したが、これに敏感なる基督教の情緒が加はつて中歐諸城壁内に封建制度の花たる武士道的情熱となつた。この熱情が伊太利に輸入され、伊國の古典的な士に培養された。然るに伊太利人は當時中歐とは異りチュートン

族ではなくまた封建的でもなかつた。伊國に於ける基督教は知的政治的思想を多分に持つてゐた。殊に伊太利タスカニ(Tuscany)地方の人間は寛大なる精神を以て武士道を採用したがその動機は一部分は藝術に資する爲めであり一部分は行動を律すべき想像的指導者を得んが爲めであつた。伊太利人は武士道の麗はしさに魅せられたが然し伊太利人の心には武士道的情熱を封建的なものとして永續せしめることが出来なかつた。希臘の友愛がソクラテス・プレートに依つて哲學化された如く中歐武士道的情熱は伊太利に於て神秘的哲學の色を初めて帯びた。アーサ物語に現はれたランスロットやトリストラムその他の騎士によつて表はされた麗はしき武士道的情熱の本質が伊太利に入つて神秘化し遂に寓話(Allegory)化された。またツルバズールの詩人の群の特徴とする機微的心理も哲學的に解釋された。タスカニの國は學者の國である。ダンテは自派の詩人等をドットリ(dottori)と呼んだ如く藝術家を兼ねたドクトルの國であつた。こ

れ等の人々は騎士でもなく扈從でもなく腕力の強い人でもなかつた。従つてタスカニ人は彼等の祖先たる武人から潜在意識的に受け繼いだ情愛を彼等の欲するまゝに改造し燒直した。斯くして希臘の友愛がアゼンスに於て最後の表現をなした如く中世武士道的情愛は最後の表現をフロレンスでなしたのである。人間の自然的情熱に根據をもつてゐる狂熱は尙武的精神の課程を経て社會的に價値を見出し種族を精神的道義的に力強く高く向上せしめて遂に哲學となつたが伊太利に於てはダンテによつて更に天國の幻想となつた。ダンテはベアトリスに導かれて「天界の薔薇園」(The Celestial Rose)に入りプレートと同様な信條を宣べてゐる。靈魂は一人の愛に導かれて眞理の道程を辿り以て人間は向上して永劫の相の下に神を冥想するに至るとはプレートの説く處であるがダンテは更にこれを神曲に於て具象化したのである。然しながらダンテがフェドラス及びシンボジアムの兩書を讀んだとは思へない。またその概要を知つてゐたと

も思へない。タスカニの神秘哲學はブレートの哲學と何の關係もなく別個に發達したものである。同じく高調された心理狀態が別々の途を辿つて而かも同じ歸結を得たに過ぎない。

ダンテ以外にも同時代に神秘主義、形而上學的解釋の見地から戀愛を寓話的に取扱つた詩人がある。リメ(Rime)の作家にしてピストイアの詩人であるチーノ・ダ・ピストイア(Cino da Pistoja)はダンテと同じ見地から戀愛を取扱つた。其他ギド・ギニチエリ(Guido Guinicelli)ギド・カヴァルカンチ(Guido Cavalcanti)ラポ(Tapo) 後にはペトラルカ等の諸詩人も亦ダンテと同じ見地から戀愛を見た。これ等諸詩人は自己の精神に向上的思想を鼓吹し高尚なる熱情を喚起した女性を自己の性格と氣質に應じて詩に織出した。彼等はこれ等の情緒を疚ましからぬ愛の所産なりと考へた。魔人は詩的讃仰の香華の煙にかくれ遂には哲學的抽象論の迷路中に姿を沒した。この詩風はシシリを経てプロヴァンスから伊太利に流れ込みフロレンス及びボロ

ーニアに入つて微妙な知的性質を帯びるに至つたダンテを除いた他の詩人は單に叙情詩人である。然らずんば煩瑣哲學者であつた。ダンテは之れ等詩人中に於ても殊に自己の人格を明に示し神曲に於ては或は劇的な章句を以て讀者の心を刺戟し內的的事實を把握して具象的心像を作つた。寫實的誠實を以て神韻縹渺たる實際の愛情を描寫せんと試みた。故に理解の出來ぬ人間はダンテが眞實を語つてゐる筈がないと思ふた。彼一派の詩人等は愛の思想を寓話化し更に形而上學的概念に化して自然的情緒の單純なる命題を複雑ならしめた。爲めに普通の判斷力では縹渺として捕捉し難きものとなつた。斯くて詩人兼哲學者たるダンテは眞善美の理想に關して知り得且つ愛し得た諸點を集合してベアトリスを理想化すると同時に象徴化し具象化した。

「果して無稽の言なりや」ダンテの家の案内者の老爺はダンテの放埒を口にした。一介の案内者の言もとより採るに足らないと云へばそれまでである。然しダンテの愛に就いて疑つた點

は強ち拒否することが出来ない。プレートトの理想愛に就いては既に冷笑者があつた。史上に有名な人々でその冷笑者があつた。ルシアン

(Lucian) ヲ云ヒエロキュラス (Epictetus) ヲ云ヒ、チヂエロ (Cicero) ヲ云ヒギボン (Gibbon)

と云ふ歷々が冷笑してゐる。ギボンはこの理想愛は道德と友誼について阿典府の哲學者等を悦ばした淺薄なる工夫であると云つた。若し疑ふならばソクラテスが眞面目であつたか否やが疑はれる。ダンテも亦眞面目であつたか疑はれる。ソクラテス、プレートトの哲學は野卑なる不道德を蔽ふに過ぎぬ菲薄なる理論でなかつたかとさへ思ふ人がある。十九世紀末の英詩人ロセツチの父及び其一派のダンテ疏註家等は既述の如くバアトリスの理想化を以て政治的若くは神學的寓話なりと推定した。成程一面には古代希臘の友愛は近代的思想より判斷して唾棄すべき墮落に陥つて居たことを認めなければならぬ。中世の戀愛も亦姦淫の弊風を惹起した。この周圍の墮落弊風に對してアゼン及びフイレンチエ

に一時的なりとも高尚な人格者のみが完全域に到達し得る靈魂の道程として異常型の熱愛をもつてゐたと辯護すれば辯護し得る。

以上の如く男性友愛及び理想的戀愛は美點も汚點も相似て居り終極の理想も相似て居る。また社會に對する貢獻も相似て居る。然るに若し當事者の立場から見れば例へばプレートトの哲學崇拜者等にとつては、伊國のペトラルカ黨は野卑なる女性愛人と見えたであらうし、ペトラルカ派にとつてはプレートト派の人々は道德的非人格と見えたであらう。男性女性の存否によつて全く別世界の如き感がする。男女同權が議論ばかりでなく如實に實現された曉には女子なりとて特別のお化粧をする必要もなく男女共身邊の裝飾を悉く同一にする日が來るであらう。さうした時には愛は希臘伊太利の區別がなくなり希臘の男性友愛は女性友愛と共に異性戀愛と同一經路を辿るであらう。世界各民族の古往今來を通じて戀歌は男性の作品に多く女性に尠い。然しこれも逆轉して尠くとも均等になるであら

う。而して男女に拘らず美は美として尊重されるであらう。プレートによつて傳へられたソクラテスは一青年の美を見之れを追求して凡ゆる美の出現状態を経験し遂に普遍的の美即ち神に到達した。ダンテはベアトリスに對する愛の力によつて知識を増進し遂に神智を把握した。性を異にすると雖兩人は美からスタートして哲學に到達した。希臘の宗教は成形的であり客觀的であり神人同形説である。従つて希臘人の信じた神々は人であり個々の神を立像に表はすことが出来た。中世の基督教の宗教は神性を具體有形物から引離した。故にこれを人間が有する可能的方法を以て表現せんと欲すれば寓話を以し神祕的解釋を以てするより他に方法がない。神が基督によつて化身となつたと云ふ以上に云ひ得ない。其他の諸聖徒の偶像に至つては末流の問題である。男性愛から出發したプレートの理想愛は實現の可能性を有せず當時の阿典の健全なる氣分でも亦これを可能なりとはしなかつた。過去十世紀の苦惱と煩瑣哲學の冥想の弊とを経

驗した伊太利に於ては一種の知的雰圍氣を作つてその弊を避けた。一事を想ふ時他事を口にし單純なる思想及び自然的本能を象徵主義の外被で蔽ふた。半ば意志的で半ば奇辯的な態度で空想的な螢火を以て事實を蔽ふた。こんな表裏ある雰圍氣は卒直なる希臘人には理解し得ない處であつた。然し煩瑣哲學の一種にはよく呑込めた表現法であつた。希臘人はプレート式の概念の非實質的なること及びその裏に何が秘むかを直に看破した。ダンテ式の武士道的戀愛は當時の藝術及び文學に於ける象徵化の傾向と當時の朦朧なる科學とを結び付けた。然しダンテの後に来る戀愛至上論者は一方にフロレンスの傳統を繼承しながら他方には人間の卒直なる情緒に立ち歸つた。例へばペトラークのラウラは明確に説明されて居ないけれども現實の婦人であり詩人の彼女に對する戀愛も亦自然であつた。まだボッカチョの「愛の幻影」(Amorosa Visione)中の二人の愛人は肉感的抱擁となつて終を告げてゐる。既に述べた如く初期に於ては希臘愛も

伊太利愛も人間情緒の異常の高調に發して居た人間は高等なる目的に向つて献身的努力をする時には矢張感情情緒から出發することが稀ではない。随つて純眞の愛より發足した人間の偉業の存在することは首肯することが出来る。その時の人間の心理は緊張力以上に緊張した時である。そんな時には單純なる人間の經驗が他人を誤解せしめるやうな神秘的哲學となり得ることも首肯出来る。ダンテのベアツリチエに對する愛も實行的見地から見れば空虚なものである。今日の人であるならば人間の衝動が如何に洗鍊されて居らうとも人間の精神が同じ人間に對する情的熱心によつて神の眞理を見出し得ると直に想像するのは一つの幻覺たるを免れない。斯る捕捉し難き螢火を追ふ後人は足を踏み外づして泥土に陥り易いことも明白である。斯る愛の理想が理性的でありとすればそれは想像的空想的理性である。然しダンテの場合に於ては特種條件の許に實際的な卓越せる効果を産んだので

ある。今日萬人の模倣すべきものではないことは明かである。斯く觀察し來る時上述の案内者の冷評も強ち無理からぬ處がある。

雜報

○鼈甲の話

海龜は肉がくえるけれども其甲は使用されない、しかし瑞珣は肉は食えぬかはりにその甲が用ひられる世界での鼈甲産地は西印度で同地方でタイマイは當時捕獲される、其方法は雌龜を捕へることで、雌は産卵の必要で島嶼又は海灣の砂地へ這上つてくる、夫を見付けて仰向にひつくりかへすと、もう起返る力が無いから、容易にとれる雌は通例濱邊へは上つて來ないから、海に浮いてゐる所を杖で刺してとる、鼈甲には其の傷のついたまゝ輸入されるものが多い此龜の背甲は最も堅く Carapace と呼ばれ幾枚もの甲良が重なりあつて出來てゐる、龜を捕へて一旦殺したのち之を沸騰せる湯の中で煮沸すると、甲良は離ればなれになる、この離れたものを Soft-shell といふ。

背甲の周圍には鋸齒狀の小さい蹄形の甲良が並んで甲の外廓を成して居る、商人は之を hoof (蹄) とよんでゐる、夫からこの蹄形甲良につながつて下腹を成してゐる甲良は Yellow-belly といふ、背甲を組成する各甲良の数は十三枚と稱まつてゐてその一枚の成育點に達したものは約長八吋中十三吋で